



リステラス星圏史略
古資料ファイル
7-6-0-没



『ブラインド・ポイント！』
(1983年作品)

(※「参考作品」として
2019年9月19日締切
『アイリスNEO賞』に出品中。

霧樹里守
was
遠野 真谷人

目次

(同人誌既発表原稿)	
【 移転 の お知らせ 】	3
(草稿&没原稿)	
『 エスパッション外伝・? ブラインド・ポイント 』 (@同人誌時代)	7
『 タイム 』 (@高校?)	11
(設定資料)	
汎宇宙特捜(リゼラセート)部隊発足	17
『 サキ、仮装パーティーのバルコニーで 』 (@??年2月2日)	18
(最初期? 設定資料)	
『 ◎ エスパッション・ストーリーズ第1話草稿として。(2) 』 (@ 1983.01.10.)	23
『 ◎ エスパッション・ストーリーズ第1話草稿として。(3) 』 (@ 1983.01.14.)	26
『 ◎ エスパッション・ストーリーズ第1話草稿として。(4) 』 (@ 1983.01.19.)	28
『 ◎ エスパッション・ストーリーズ第1話草稿として。(5) 』 (@ 1983.01.21.)	30
「オレはねェ、ただの、連盟保安局特務部員なの。了解？」	32
『 (草稿) 1 』 (@中学1~2年) “ボス”、リグビー、リテロ	34
『 (草稿) 2 』 (@中学1~2年) 「ヤスカ・イルレム少尉、次の任 務だ」	38
(借景資料集)	
奥付	
奥付	45

(同人誌既発表原稿)

【 移転 の お知らせ 】

- ☆
- ☆ 超～大幅に！ 加筆&改稿した2023年版、
- ☆
- ☆ こちらに移転しました。
- ☆
- ☆
- ☆ 『エスパッション・シリーズ』
- ☆
- ☆ ... ブラインド・ポイント！ ...
- ☆
- ☆ <https://novelpia.jp/novel/1281>
- ☆
- ☆

=====

(発掘整理中)

=====

(草稿&没原稿)

『 エスパッション外伝・? ブラインド・ポイント 』 (@
同人誌時代)

<http://76519.diarynote.jp/200704270337200000/>

2007 年 3 月 21 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5 <http://76519.diarynote.jp/200704270337200000/>

エスパッション外伝・?

ブラインド・ポイント

by 尊貴 真扉 (とき・まさと)

一、盲目宙域 (ブラインド・ポイント)

二、影 (かげ) の船

.....

一、盲目宙域 (ブラインド・ポイント)

三次元映像 (スクリーン) はもやがかかったように見えにくかった。

深宇宙。

光点がひとつ、するすると逃げていく。

「ちょっとォ〜〜！ なに、してんのよ、もっとスピード上げてっ!!」

星間連盟保安局から借りうけた超速探査艇の操縦室だ。

地球人、アリニカ・デュル=セザール警部は銀行強盗のニトロよろしく、自慢？ の痲癩玉を破裂寸前にさせて叫んでいた。

「無茶いうなよアリー。こっちだって精一杯やってんだぜ」

部下のひとり、小柄な東洋系人のダイムが細い黒目をつりあげて言いかえす。となりで焦茶色の肌のバムボロウが落雷をおそれる熊のように太鼓腹のうえで首をすくめている。

「だって、逃げちゃうわよ？ 逃げちゃうっ」

ドン！ ぐら。

「たのむから制御卓（コンソール）は殴らんでくれっ☆」

「ごめん！」

重力方向が逆転しかけて立っていたアリニカは一瞬宙に浮く。

操縦士たちは泡をくって航路たてなおしを入力した。

それだけでなくも艇はさっきから奇妙な動きをしている。

あいての航路を計算・予測して常に邂逅点を設定しながら最短コースをえらぶという宇宙空間での理論（セオリー）を無視しきって、文字通りに追跡するむこうの航路をそっくりなぞっているのだ。

警部としては異例に若い二十六歳のアリニカは、赤い巻き毛にふちどられた日焼けしない白い肌に点々とみごとなソバカスを浮きたたせ、新緑色の大きな両目を山猫のように光らせていた。？

はやく！と、もういちど叫びだしたいのを、アリニカはなんとかこらえる。

このあたりの星区にはところどころこういう場所があるのだ。

盲目宙域（ブラインド・ポイント）連盟のことばでは、“鉤石戦争の傷跡（リ・カン・ザリア・ソルテーン）”。

五千年前に恒星系ふたつを消滅せしめた星間連盟（リスタルラーナ）の技術力をもってしても、未精製の鉤石（ソルテーン）の残滓を回収しおわるにはあと一万年ほどかかるという。

大気圏外に飛びだしてからわずか千五百年の地球人には想像の難しい数値ではあるが。問題は、ばらまかれた粒子のおかげで電磁波から赤外線から、およそすべての探査機能が麻痺させられてしまうのだ。

いまの頼りは非常用の光学式船外カメラだけ。

それも、微小な隕石群がバリアにさえぎられて燃える炎で、ぼうっとした紫色に曇ってしまう。

自動障壁（バリア）で処理しきれない大きな岩塊にぶつかればそれでイチコロだった。盛大な花火におくられて冷たい宇宙に散ることになる。

他の場所でなら一、二隻は見られるソルテーンの回収船も、ここは政府の実験宙域に指定されているとかで入っていないし。ここで遭難した日にはだれも探しにも来てくれない。警部としては異例に若い二十六歳のアリニカは、赤い巻毛にふちどられた日焼けしない白い肌に点々とみごとなソバカスをうきたたせ、新緑色の大きな両目を山猫のように光らせていあ。

小粒でぐっとくる（コンパクト・グラマー）と評される彼女のすぐわきで、くつくつと喉（のど）で笑う場違いな音がする。

連盟保安局のローラー刑事だ。

無重力用の密封容器にはいった飲料（ティレイカ）を手渡しながら、

「まあ、そんなに焦ってみても仕方ありませんよアリーさん（ミズ・アリー）。とりあえず今は見失なわないことだけ考えて、ここを無事に抜けないと」

「ローラー、あなたね。」

「それからならあなた好みの派手な銃撃戦でもなんでも自由にやって下さって結構ですよ。わたしは余計なことは上司（うえ）に報告したりはしませんから」

「よくも言えるわねえ他人事（ひとごと）だと思って!!」

,

コメント

<http://76519.diarynote.jp/>

りす

2007年4月27日 3:52

.....で、七転八倒しまくった「サキと保安局特務部の遭遇戦」はは、
全然まったく姿を変えて、こういうカタチに.....☆(◇;) ☆

でもってこのエピソードからは完全に消滅(?)しちゃった、
「ルイック」さんてば、哀れ.....☆(後に別の名前で、
サキの保安局時代の相棒として復活(?)するけど.....☆)

>アリニカ・デュル・セザール

.....「走りっぱなし(ランエンドラン)アリー」さんに、
こんな立派な? 本名があったなんて.....これも忘れてた☆

(◇;)”

<http://76519.diarynote.jp/>

りす

2007年4月27日 3:53

あ、ちなみにこの『ブラインド・ポイント』は、
一応「作品」としては完成しています☆

(同人誌既発表作品♪)

『 タイム 』 (@高校?)

<http://76519.diarynote.jp/200704220036140000/>

2007 年 3 月 4 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5 <http://76519.diarynote.jp/200704220036140000/>

タイム

宇宙空間。真空。絶対零度。船の残骸。飛び交う熱線銃の輝やき。自分の手元から応酬の青い光がほとぼしり、殆ど無意識に動く体とその度に確実に相手を倒して行く。

サキは、どこか遠く離れた意識のどこかで、畏ろしいと感じていた。

自分がつね日頃おもしろがって、スポーツとして訓練したものの結果がこれなのだ。初陣の、しかも絶対的に不利な条件下での撃ち合いに参加していて、何らの精神的プレッシャーを受けもしないで人を殺している。護るべき相手を背後に控えているとは云え、その事に対して恐怖感を覚えないというのは少し異常に過ぎる状態だった。心の中になぞかすかな異和感。

「バカヤロウこのボケ。殺されたいか！」

しかし生まれつきの熟練した戦士であるレイには、やはり初心者危なっかしさが目に余らしい。例によって口汚くののしられて、思わず言い返そうと意識をそちらへ振り向けた一瞬.....

「アホッ!!」

レイの絶叫がヘッドスピーカーの間で狂気のように反響する。だがそれにも増してサキの心に爪をたてたのは、ギリ、ともビリ、ともつかぬ不吉な運命のきしみだった。肩先の装甲が熱線に吹きちぎられたのだ。

ぞっ、と背筋が凍りつかんばかりの数秒間。初めはかすかに、徐々に裂け目を押し広げながら、空気がもれだして行くのが感じられる。

(宇宙デノ戦イノ時ニハ銃ノ目盛りハ絞ッテオク) 出がけにレイに注意されたのだ。(えねるぎいガ長持チスルシ、当リサエスレバ効果ハ得ラレル)。効果とは、ではこの事だったのだ。装甲に傷を負った者は恐慌に陥ちいり、ほぼ完全に戦闘能力を失う。断末魔の長い分だけ、真空の戦場にあっては即死よりも酷い。

レイが前面に踊り出て、楯となって狂ったようにビームを乱射している。後方から誰か必死で呼びかけて来るようだったが、もはや空白になったサキの心にはどんな強力なテ

レパシーですらとどいて聞こえてはこなかった。ぐらり。宇宙震のように世界がゆがむ感覚がある。意識がずっと遠のく。

「バカヤロウこのボケ。殺されたいか！」

しかし生まれつきの熟練した戦士であるレイにはやはり初心者の危なっかしさが目に余らしい。レイによって口汚くののしられて思わず言い返しそうになりながらも、サキは油断なくレイ・ガンをかまえてあたりを配っていた。

と、まるで予知していたようなタイミングで、目を遣った方角から熱線が来る。サキがやりなれた動作でそれをよけると、背にとった残骸の一部が一瞬輝いて少しばかり溶けた。「はッ！」急に透視能力が働き始めたようだ、サキは今撃ってきた奴の心臓を一撃のもとに貫くと、無意識のうちに銃のゲージを引き上げて正確な連射をくり出し始めた。

絶対的な暗闇の中、大小の残骸が無数に散らばる中であって、それから後、サキに急所の貫通以外の傷を終わされた者は一人もいなかった。

頼まれてレイが小型の衝撃銃を作ってやったのは、その事件からひと月程過ぎてのことである。サキは戦闘中の奇妙な重複感、一瞬の夢ともつかぬ恐怖を夢現つのうちに記憶していた。そして、精一杯のろいや罵詈雑言をまくしたてながらも体を張ってかばおうとしてくれたレイの後ろ姿の残像を。

「なんか最近あいつヴ気味じゃない？」

いくらからかっても平然と笑っているようになったサキの事を、レイはそう評してひとしきり首をひねっていた。

コメント

<http://76519.diarynote.jp/>

りす

2007年4月22日 0:46

.....サキに「時間遡行（タイムリープ）」の能力が芽生えた最初のエピソード、のつもりで本人は書いたのですが、高校の文芸部周辺にこの草稿を回覧したところ、みんな「わかんない」とのことで、不評でした.....

うわははは☆

今、読むと、やっぱり「わかんない」な、そこんところ.....

(◇;)>"

(設定資料)

汎宇宙特捜（リゼラセート）部隊発足

<http://76519.diarynote.jp/200702200131060000/>

2007年2月20日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5

> 日本酸素 OASYS 30 日面接 5~7月

リスタルラーナ暦 0305 / 06 / 07

(リスタルータ)

汎宇宙特捜（リゼラセート）部隊発足

『 サキ、仮装パーティーのバルコニーで 』 (@?? 年
2月2日)

<http://76519.diarynote.jp/200702162320150000/>

2007年2月12日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5

「.....しかしまあ、もののみごとに男装してきてくれましたなあ☆」

「アッハ！ わけのわからん男性軍にかこまれてるよりは女の子と
ふざけてる方がおもしろいからね。おまえさんだけだよ、まとも
につきあってくれるのは。」

「もしおれが、サキのそばにいたいから、こういう態度をとっている
んだとしたら、どうする？」

「.....え.....!?!」

「らしくないね。頬が上気してるよ。」

「ああ、冗談か。驚かさなくてくれよ、まったく。
大事な友達を失いたくはないよ。」

「友達ねえ。おまえさ、自分の性別、自覚してるか？」

「!.....わたしに性別なんてものが、あると思ってらっしゃるわけ!?!」

「ちがいない。なにしろ、このオレみたいなボー・ギャルソンを見ても
何とも思わないんだからな」

「それを言うならプレイボーイだろ！」

- > ※イギリス騎士風？「男装」のサキと、
- > 中世中部欧州風？ ビロードのドレスのエリーのイラストあり。※
- >
- >
- > 2/11 わ、久しぶり。懐古趣味のドレス♪

(最初期？ 設定資料)

『 ◎ エスパッション・ストーリーズ第1話草稿として。
(2) 』 (@ 1983.01.10.)

<http://76519.diarynote.jp/200704270224080000/>

2007年3月17日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5

○やっば3人称にしましょうね。1時の興奮でペースを乱しちゃ行けない。

(起) 仕事か何かで移動の際に休暇を兼ねて
豪華客船で時間を潰すことにしたソレル女史一行。
／連盟警察特務版(男女2名 or 男性数人)が
悪人(テロリスト、惑星独存論者、ケティアと同郷かしら)
追っかけて船に乗りこんだところVIPがいたんで
万がいちを考えて護衛に人数をさく。

(承) 悪人集団との実に明るくインケンな小競りあい。
サキ達と特務の珍道中。

(転) 盛り上がりの大詰め。宇宙空間銃撃戦。

(結) 目出度目出度(めでためでた)。

※あくまでも長編にする気はない★100枚 or 400枚だけ？

.....

う～。設定資料持って来とらんと無理じゃー。

注) <って書き込んであるってことは、

つまり、学校で授業中に書いてたわけですね、これ☆(◇;)”

登場人物。

ソレル女史御一行（女性 5 名）：

ソレル女史。…… 氷の女博士はまだ外面が悪い。

サキ…………… 基本設定おっかけると暗くなる。

初期のイメージで。16 歳半くらい。

レイ…………… 同上。髪切ったあと。17 歳。

エリー…………… ソレル女史の片腕としての活躍の片鱗を
見せはじめている。えっと、20？

ケイ…………… いつもどーりだよ。15 歳の誕生日を兼ねる。

特務班御一行（男性 6 人）：（男女、&関係ないの、1 人？）

ロキ

レザイ

サリス

リセ

ヤミン

ラシエ

悪人さま御一行：なにをやらせよう？

+++++

○ やっぱり彼らの時間的・社会的 situation をしっかり考慮に入れなければストーリー、
組めないよ。明るい話、暗い話の別は小手先で変えられるんだから、さ。

○ 時間的には基準年齢であるサキ・17 歳の 1 歩手前。16 歳半。

レイは髪を切り、サキは片方失明した後で、だけど 1 ト月も間を置けばこの連中のこと
だから、他人の前ではもうすっかり明るくなりきってる能天気少女。エリーはジースト
滞在中にすっかりソレル女史側近としての能力を身につけはじめ、外交官になろうとい
う志望を確立している頃。ケイは…… スクーリング期間の楽しい思い出があるね。

やっぱりエスパッション号を舞台とする。のだとしたら都合上ジーストの子供達を迎え
入れる以前、てことはレイがまだリスタルラーナに戻っているヒマがあるのだから、“嵐
のはざまに” からそれほど時間たってないね？ てことはサキはまだなんとなく暗っぽい。
悪人が乗り込んで来た時に素直に善悪 2 元論はたてない筈。

ソレル女史は不在。

○社会的には.....もちろんソレル女史の名を出せば誰も知らぬ者のない。でもそれはまだ高名かす崇高な女性科学者として。サキは“サエムの娘”として地球知識人階級ではどこへ行っても通用する筈だけれども、無名。レイはジースト開国前後にヴィジ・スター程の知名度になっちまったけど髪切ったし大分面変わったからね。

(サキ、レイ、ケイ、エリーの雑描きイラストあり。)

『 ◎ エスパッション・ストーリーズ第1話草稿として。
(3) 』 (@ 1983.01.14.)

<http://76519.diarynote.jp/200704270236540000/>

2007年3月18日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5

1.14

○よーするにさー、“散る宇宙（そら）”と“癒えない傷跡”の中間に入る物語書きゃあい
いわけでしょ？ 明るいストーリー考えようとしてこれ以上の所はないって位置ねっ!!

◎ その半年間のサキの行動

ある程度元気を回復させてからジレイシャ・アンガヴァスを離れる。（レイは？）
しばらくうろついた後、
エスパッションへ帰り、
リスタルラーナ上に下宿を持つようになって、
その間 E.S.P. によるものと思えない犯罪があいつぎ、“傷跡”発端
ソレル女史が従兄妹の保安局長にかけあって、
サキ、レイ、調査の為ジーストに飛ぶ。

◎ 100枚という枚数制限がある以上、登場人物は極力しぼらなくちゃいけない。……だっ
てさ。100、てゆーのは、1聞、大変そうに聞こえるけれど結局は短編でしょ？（調べて
みたら“あたしの中の……”が90枚。）ついでに仮にもコバルトへ初投稿しようって
作品である以上、それらしいネタも仕込んでかなければならない。

◎

+++++

? ヒッチ・スペースシップやっつぶらりぶらぶら 1 人旅途上のサキ、とある辺境航路で、半年前に発見されたばかりの“虹色岩礁”を撮りに行くというカメラマン（実は連盟保安局情報部 or 特務部）と知り合い、ヒマなこととて着いてこうかなァという気になっている。

? 途中、恒星系近くでワープアウトしてきた他の船とガッシャン。乗っているのは子供ばかり。

? 虹色岩礁に最も近い恒星系の唯一の惑星へ、非合法にだまされて入植させられた 1 団が危機に瀕しているという。あいにく通信器とレーダーがいかれまして。(対隕石バリアは無事)。

? 空気が足りなくなったら惑星に不時する余暇ナイのではないだろうか。

.....

○テーマっていったって結局はサキの恰好良さを描きたいだけなんだい。

○“エスパッション”てな言葉や具体的にで表すのやめよう。その方が 2 作目おもしろい。

.

『 ◎ エスパッション・ストーリーズ第1話草稿として。
(4) 』 (@ 1983.01.19.)

<http://76519.diarynote.jp/200704270250440000/>

2007年3月19日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5

1.19.

あらすじ第1稿

(プロローグ) 10枚

○雨やどりから知り合って偶然同じ船に乗ることになっていた2人。
(でなくても良いなァ、別に。)

○サキとルイック。宙港に向かう途中でチンピラにいちゃもんつけられて (>人買い船の伏線?) サキが腕がたつこと、慣れてる様子であることを示す。

決めなきゃならないこと。

- ・どこの惑星? 辺境だよ。<リネークーラ。
- ・虹色岩礁の説明。< 必要なくなったね。

(起) 20枚

○船旅は数日間、チェスでもやって「お宅.....手を抜いてるね」で知能の高さ。ぐわしゃんと事故ってサキの即応性、簡単な医術。船長・船医なかと知り合っコックピットへ入り込む。

(承) 20枚

○酸素が足りない。通信機がいかれた。とりあえず応急処置中にブラックシップの攻撃。

航行機能はなはだしく落ちる。ルイックが後ろからまわって敵さんやっつけようという計画をたて、「あ、わたしも行く。」「普通の女の子が……オレ保安局。」「肩がきありゃ偉いってもんじゃないでしょ。」で、勝利。サキ ESP 伏線？

(転) 20 枚

○ 人殺し!! つーんでサキが落ちこむ。空気足りないし座標を失っちゃった。……んで不時着。子供達が回復してダメだダメだと騒いだ時には遅すぎた。気絶して助けられて「何処です」「惑星アンブラ」「失われた楽土(リアンブラ・アルマローロ)?!」隊長さんのお話。「エルリエイラ(大エイ帝国)も地におちたなー。」

・ディテール作ること。

(結) 20 枚

○ 数日たってサキは子供の相手したりなんだり。脱出作戦途上にスパイと看視員たち相手にドンパチやってルイックのフラッシュボン☆
「これは試作品だったんで性能あまりよくないんだ」ゆーて工具借りて自分のを改良するサキ。そうこうするうちに日数がたって敵さんの船がおりて来る。ドンパチ。「人殺すのやだ!」「殺さなきゃやられんだぞ」「そのほうがいいもの!」「オレ達見殺す気か? かもしれない知らない人間の方が、あんたが死んで悲しむ人間より大事だったのかよっ!!」そして サキは撃ち。特務部 D クルーがドタンバで騎兵隊。

(エピローグ) 10 枚

○ 船着場にて。ルイックは D クルーと共に更に追って行く。サキはまたヒッチハイクひっかけて。

○ 「“死んで悲しむ人間” のリストにオレも入れといってくれよな。」
握手して good bye.

(※サキの ESP と世界情勢と保安局の機構と、
どこに入れるのよお? っ)

『 ◎ エスパッション・ストーリーズ第1話草稿として。
(5) 』 (@ 1983.01.21.)

<http://76519.diarynote.jp/200704270321140000/>

2007年3月20日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5 <http://76519.diarynote.jp/200704270321140000/>

1.21.

設定なんかもういいじゃないか書きだしちゃいたいよ、という気がしないでもない。
下の絵を見てタージが描いてくれたやつ、次ページ。

(※高校の時の友人？ の描いてくれたイメージイラスト
..... あったはずなんだけど、現在行方不明..... (T _ T) ”

そうかサキってもともとこーゆー顔でこーゆーきつい表情をしてたんだ。う～ん。なまじ迷いや色気が出てから紀久子さんに“女々しい”と酷評されるようになったもんなア.....

120 ぶんの設定を決めるまでは描かないこと。

(サキとレイのイメージイラスト (自作) あり)

.

コメント

<http://76519.diarynote.jp/>

りす

2007年4月27日 3:14

.....で.....。(◇;)"

結局、これだけ(?)設定つめておきながら、ちっとも書かなかったばかりか、この設定が、あったことさえ忘れ果てて、リネクターはリネアクラインに変名してしまい、あげくに元ネタあったのを忘れて全く別のエピソードの舞台になってるし.....(これは既にかいた。同人誌既発表☆)(◇;)"""""""""

「オレはねエ、ただの、連盟保安局特務部員なの。了解？」

<http://76519.diarynote.jp/200704220110140000/>

2007 年 3 月 6 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5 <http://76519.diarynote.jp/200704220110140000/>

「わたしゃ“普通の”女のコなんぞじゃないってば。そっちこそ普通の、ただの、単なる男の人でしょオっ!!」

「.....あなの。」

ルイック、振り向いて、こうなれば最後の手段。

「オレはねエ、ただの、連盟保安局特務部員なの。了解？」

「ほあん.....きょく!?!」

サキは鳩が豆鉄砲の顔をして。

ルイックの眼がきゅっと細まって職業用おどしの表情に近くなった。もう1度たずねて念を押す。

「了解？」

したら部屋で大人しくしていると云おうとして、

「りょう、かい、.....し・な・い。」

灰色と銀の瞳に彼がたじろぐほどの物騒な微笑。

「肩書きがつけば偉いってもんでもないでしょ。」

☆

.

コメント

<http://76519.diarynote.jp/>

りす

2007年4月22日 1:03

..... う〜ん..... ☆

この頃のサキってば、えらい「おきゃん」だ☆ (◇;)

そして文体が、新井素子 (『星へ行く船』) の、
影響うけまくり..... ☆ ☆☆ (◇;) ☆☆

『 (草稿) 1 』 (@中学 1~2 年) “ボス”、リグビー、リテロ

<http://76519.diarynote.jp/200705150107040000/>

2007 年 5 月 15 日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5

「サキコ・ラン=アークタス。通称サキ・ラン。.....フム」

先に送られて来ていた書類の一部をざっと思い返しながらか、“ボス”、リグビー、リテロ (リグビーが名字である) は、目の前に立つ少女を見るときもなしにながめていた。

いや、ながめるなどというのは誤りである。知らぬ者の目から見ればぼんやりした一瞥つ、ともとれる表情の下で、“ボス”=保安局特殊そう査課長は、瞬時に少女の全てを把握していた。

身長 171~2cm、身長約 27 ピアレス、体重 473 レア。胸囲 B・W・H、上から 15 - 10 - 14. 7。髪・腰の上までの長髪、自毛、青味がかかった灰色。瞳、同色、コンタクトなし。はだの色黄金がかかった淡いアイボリー.....

いや、そんな事はどうでも良かった。全て書類通り、立体写真通り。ただ彼の冷徹な黒い瞳を (それとわからない程とは言え) ゆらめかせたのは、少女が一見してかなり華しゃそうな外見を持っている事だった。

27 ピアレスと言え、女性にしてはかなりの長身である。15 - 10 - 14. 7、すらりと引きしまってはいるが、脚の肉づきも良い。はっきり言って、比類まれな、という程の黄金の優れたスポーツ選手にのみまれに見い出される、完璧に均整のとれたプロポーションと、言って良かった。それが、なぜ、ほっそりと優しげな印象を与えるのか.....

しばらく、(といっても、コンマ 2. 3 秒) 黙思した後に、リグビー=彼、は、解答を後刻に譲って立ち上がった。

どのみち、この少女は今日から完全に彼の指揮下に入ったのだし、観察する機会はいくらでも得られる筈なのである。

彼女=サキは、外見より余程緊張してその会見に臨んでいた。

今日から、この男=彼の指揮下に入るのである。命、及び全運命をゆだねる相手と言って良い。濃色のサングラスのかけにひそんだ暗く、冷たい瞳。しゅう念のように伸びた闇のストレートヘア。細く高い鼻筋、白い肌。サキの目にとまった男の特徴と言え、せ

いぜいがこのくらいのものであったろう。しかし、彼女にはそれで十分だった。大丈夫、この人はそれ以上を知る必要はとりあえず……
ないのである。

そこは、とある巨大な地下構築物の中に一室であった。広いフロア。白々と証明が周囲を照らしている。

「良かろう。」彼リグビーはうなずいた。「今日から君はわたしの指揮下に入る。わたしはリグビー、リグビー、リテロだ。」確認。サキは肯く。

「特捜課の性格は既に知っている事と思う。特捜課は保安局の一分室でありながら、保安局との間に命令系統を置かない。特捜課はありとあらゆる情報の収集と共に刑事・民事・及び国際関係等における大規模な陰謀・犯罪のせん滅を任務とし、物量作戦の必要な時にのみ、保安局長との信頼関係に基づいて協力を要請する。保安局一般側で我々の手を必要とした場合にも同様に、わたしの所へ出動依頼が来る。」

再びサキは肯く。彼女の場合、弱冠 17 歳での入課というのは、それと同じ伝手（ルート）をたどった拳句のものだったので、ある。

「君は現保安局長の要請でこの課に受け入れられる事になった。説明を受けた君の“特殊能力”というものについても、わたしなりの認識は持ったつもりだ。一抹の不安は残るが」

「超能力というものは、理論的には誰しものが持ち得る筈の素養なのです。ただ発現するかしないかと言うだけで」

「それは聞いた」

リグビーは書類に記載もれだった彼女の特質を発見して内心きょう嘆しながら素っ気なく言った。

「書類、資料、それから君を推してきた人間たちの人物に信用をおいて、特捜課は、異例として君を即日採用で活動網にくみ入れる事にした。」

「はい」サキは手で示されて椅子に腰を降ろした。これでリグビーリッガーにはサキに関する疑問点が 3 つに増える事になった。最初の一つと、なめらかでどこか優しい芯のある肉声の声楽的な音域分類名称。そして、この地味めだたないが時折り息をのむ程に美しい洗練された挙措動作、及び躰が、いかなる人物のどんな教育によって培われたものであるかである。

「第一の任務を言う。君はこの後直ちに特捜課養成所に入所。半年以内に第三課程をり修し、いずれの課目も中の上～上の中程度の成績をとらなければならない。」

> リグビー・リテロ

> リガー

> スガル・リグビー

サキは顔色一つ、顔筋一筋動かしはしなかったがあからさまに表情をかえるような礼儀知らずな真似こそしなかったが、それでも瞳の奥に不満と疑問の色が浮かぶのをまでは隠しおこせる事ができなかった。養成所の卒業までには8年かかる。そのようなムダを費やしたくなかったからこそ、無理を言って伝手をたどらせてもらったのではなかったか。「にらむな」

彼＝スガル、リグビーが、この男にしては打ち解けたとって良い表情で唇の端をつり上げた。彼にしては、会って話をするのこそ始めて直接顔を合わせるのこそ初めてとは言え、目の前の少女の人柄を満更知らないわけではない。これまで2～3度、この彼女が否応なしにまきこまれてしまった事件を通じて、部下から話を聞きもしたし、映りの悪い映話（ビジフォン）を通じてごしに二言三言かわした事もある。少女＝サキは有能だった。銃その他の武器の扱い、格闘技術、探索には不可欠の特有の勘のひらめき……。その点では、とても素人だなどとは思えない。即日実戦に投入しても大丈夫だ、という確信がある。しかし。

「第三課程の教育課目は、変装術、暗号学、隠密行動における基礎知識と実習訓練などだ。承知しておいてもらうが、特捜課員の活動においては、これまで君の見てきたようなハードボイルドな面が占める割合は、低いのだ。大部分が地味なスパイ行動に占められていると言っている。ちょっとした不満程度でいちいち目の色を変えているようでは、生きて帰っては来られん。

もう一度言う。サキ・ラン＝アークタス。君は今から養成所に行き、普通なら最低一年かかる第三課程をり修、半年以内に戻って来る事。それとどうじに……」

サキは座り直した。彼＝スガルの言葉に、ただ訓練を命じるのとは異った裏を感じたのである。

スガルはふっと言葉を切って、この異常に勘の良い少女今は、スガルも、サキが少女と女性nちょうど中間点にいるのだという事に気づいていたがをながめ直した。これも超能力とやらの一部なのだろうか？

「半年後に、ジーストの国家元首が我がリスタルラーナを訪れる。」

サキは肯いた。知っている。未だ政府要人の一部にしか通達されていない筈の機密事項ではあるが。

「その際の警護の大半は、通例で、我が特捜課が請け負う事になっている。臨時に大人数を必要とする任務には、指揮者を除いて全て養成所から動員する」

サキの脳裏にある考えがひらめいたが、先回りして話し出す程、軽薄ではなかった。

「……その勘の良さも超能力とやらの内か？」

「え？」

サキは不意をつかれてキョトンとする。サキには予知能力は殆ど無い。テレパシーは自己暗示で封じてある。自分の勘の良さと、超能力とを、それまで結びつけて考えた事は無かった。

「まあいい」スガルがあいまいに手を振る。

「その養成所に、逆スパイが潜入。人数・性別・階級などは一切不明だが、かなり組織立った動きを見せて情報を外部へ流し続けている。サキ・ラン、任務は、第三課程の終了、逆スパイを派遣して来る組織の正体の探索、同じくその目的の調査。計3つだ。い

「ずれも半年以内に遣りとげろ」

「了解。」

りんとした、涼やかで一本芯の通った声で短かく答えると、サキは立ち上がって部屋から出て行こうとした。

「それから」

少女の野鹿のような後姿に目を遣りながら、男はあわてるでもなしにつけ加えた。

「おまえの任務と正体について知っているのは、わたしの他には養成副所長のみだ。そのつもりで行動しろ。」

サキは黙って肯くと出て行った。それだけ聞けば、解る。

つまり、養成所長自身もが、クサイ、のだ……………。

(第三者描写!!)

……………

養成センターと保安局本部は、きっかり惑星半周分の間を隔てて建造されている。万ヶ一どちらか一方の機能が破壊された場合を想定して、遅滞なく組織の移動ができるよう備えてあるのだ。

あれから三日後、身の回りの品の入ったショルダーバッグ一つを携えて、サキは幾重ものゲートをくぐり抜けた。

「ようこそ、サキ、ラン。書類は回って来ている。第三課程に編入。体術訓練ははぶく、だな？」

「はい、教官。よろしく申し上げます」

「む、わしは第3課教育主任のルズンだ。」

あああ……☆ スケバン刑事の、影響モロ出し……(◇;) ……

『 (草稿) 2 』 (@中学1~2年) 「ヤスカ・イル
レム少尉、次の任務だ」

<http://76519.diarynote.jp/200705150212250000/>

2007年5月15日 http://76519.diarynote.jp/?theme_id=5 <http://76519.diarynote.jp/200705150212250000/>

「ヤスカ・イルレム少尉、今度の君のおまえの次の任務だ」

薄汚ないメトロの便所の中で、彼は上司からの伝達を受けとっていた。映像などぼく然と人の姿だという事が判る程度のビデオ・カセットである。画面には、あまり暗いので、かろうじて男性らしいと思える程度にしか解らない人物がぼんやりと映っている。

「見たまえ」「これを見ろ」

ぱっと画面が変わって、鮮明な一人の少女の姿が現れる。そのまりの光度差に、一瞬、彼にはその少女自らが銀色の光を放っているかのように見えてしまう。

画面は次々に動いてその少女の様々な角度からの表情、姿勢、体型などを見せてよこしたが中には変装した(つもりらしい)スナップなども数葉あったがを送ってよこす。

それと同時にかなりの量の数値的な情報をも、彼は、現われては消える細かな字幕の網から読みとっていた。

「で？」と、無駄と知りつつヤスカは、彼は、まるで通話中であるかのように低い声で疑問視をさしはさむ。

すると、彼の事は全て知っているが、彼の方では未だに、そして一生、正体はおろか名も顔つきさえも解らぬ男=暗闇の箱の中の上司が、質問に呼応するようなタイミングでにして、本題を切り出すのだ。

「名前はサキ・ラン=アークタス。サキ・ランの通称で通しているが、地球人だ。この女が、今度特例として特捜養成センターへ入所する。特捜(エス・ピー)課に就任する事になった。おまえの任務は、この女に近づき、S・Pになろうという意志を半年以内にくじかせること。ただし、一切の危害を加えてはならない。できる事なら恋を仕掛けて一生を家庭に閉じ込める事が望ましい。この女が自然死に至るまでの一生を監視せよ。」

「監視？ つまり、ボディガードが目的か」

一人問い返す彼の声を尻目に、画面の人影は途中で消えた。たまにはタイミングをはかり損ねる事もあるものだ。

「は、ついに俺の一生を縛りつけやがったか」

彼は吐き出すようにつぶやいて、薄汚れた彼本来の世界影の世界を後にした。

(◇;)

(借景資料集)

奥付

奥付

リステラス星圏史略

古資料ファイル

7-6-0-没

『ブラインド・ポイント!』

../../book/112774

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：../../users/masatotoki/profile

感想はこちらのコメントへ

../../book/112774

電子書籍プラットフォーム：パプー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

リステラス星圏史略 古資料ファイル 7-6-0-没 『ブラインド・ポイント!』

著 霧樹 里守 (きりぎ・りす)

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
